問題4-1 (Q(瓦,日)=Q(瓦+日)に関する問題)

- (1) d= 12+日のQ上での最小多項式を求め上、
- (2) Q(\(\overline{L}\), \(\overline{L}\)) = Q1 \(\overline{Q}\) \(\overline{L}\) \(\overlin

解答例問題3-4の結果より、Q(下,下)=Q(下+戶).

 $[Q(\sqrt{1}+\sqrt{3}):Q] = [Q(\sqrt{1},\sqrt{3}):Q] = 4 \times 3.$

X2-2はQ上既的なので、「IOQ上での最小多項式になる」

 4×12^{-1} , $Q(\sqrt{12}) \cong Q(\sqrt{12})/(\chi^2-2)/20^{-1}$ $[Q(\sqrt{12}):Q] = dim_Q Q(\sqrt{12}) = dim_Q Q(\sqrt{12})/(\chi^2-2) = 2^{-1}$ $Q(\sqrt{12}) = Q(1) \oplus Q(\sqrt{12}) = \{a + b\sqrt{12} | a, b \in Q\}$

万年Q(豆)である、もしも、万千Q(豆) ならは、「万= $\alpha+b$ 」、 α 、b そ Q と書ける 西辺を2乗すると、 $\beta=\alpha^2+2b^2+2ab$ 豆 なので、 $\beta=\alpha^2+2b^2$ かっ $\alpha b=0$ となる、しかし、これは不可能なので、「万年Q(豆)」

問題 3-5の解答例で 移照せよ、 別のな法もある。 (ユー3 はの(正)上既約)

(1) [Q(取+5): Q] = [Q(取,与): Q] = 4 より、 (2+5の Q上での最小多項式は4次式になる, ゆえに、X=(豆+53 で 0 になる f(x) ∈ Q(x) で 4次のものかい (1+5の Q上での 最小多項式になる。

この十(ス)が「12+月のQ上での最小多項式になる、

(2) $[Q(\underline{r}):Q]=2$ より, $Q(\underline{r})=Q1\oplus Q\overline{r}$, $[Q(\underline{r})(\underline{r}):Q(\underline{r})]=[Q(\underline{r},\underline{r}):Q(\underline{r})]=2$ より, $Q(\underline{r},\underline{r})=Q(\underline{r})1\oplus Q(\underline{r})$ 。 $[Q(\underline{r})(\underline{r}):Q(\underline{r})]=[Q(\underline{r},\underline{r}):Q(\underline{r})]=2$ より, $Q(\underline{r},\underline{r})=Q(\underline{r})1\oplus Q(\underline{r})$ 。 $[Q(\underline{r}):Q]=2$ より, $Q(\underline{r})=Q(\underline{r})1\oplus Q(\underline{r})$ 。 $[Q(\underline{r}):Q]=2$ より, $Q(\underline{r})=Q(\underline{r})1\oplus Q(\underline{r})$ 。 $[Q(\underline{r}):Q]=2$ より, $Q(\underline{r})=2$ より。 $Q(\underline{r})=2$ より, $Q(\underline{r})=2$ より, $Q(\underline{r})=2$ より。 $Q(\underline{r})=2$ なり。 $Q(\underline{r})=2$ より。 $Q(\underline{r})=2$ より。 $Q(\underline{r})=2$ より。 $Q(\underline{r})=2$ より。 $Q(\underline{r})=2$ なり。 $Q(\underline{r})=2$ より。 $Q(\underline{r})=2$ より。 $Q(\underline{r})=2$ より。 $Q(\underline{r})=2$ なり。 $Q(\underline$

もしも、 $\alpha,b,c,d\in Q$ かっ $\alpha+b\Omega+cG+dG=(\alpha 1+b\Omega)\cdot 1+(c1+d\Omega)\cdot G=0$ ならは、 $1\times G$ の $Q(\Omega)$ 上での一次分生性より、 $\alpha 1+b\Omega=c1+d\Omega=0$ となり、 $1\times \Gamma$ の α 上での一次独立性より、 $\alpha=b=c=d=0$ となる。 ゆえに、 $1,\Gamma$ 、G、G、G は G と一次独立である。

以上によって、 $Q(\bar{\nu},\bar{\mu}) = Q1 \oplus Q\bar{\nu} \oplus Q\bar{\mu} \oplus Q\bar{\mu} \oplus Q\bar{\mu}$ が示された。

以上の証明は、体の拡大の列 $M/L_L/K$ (MOLOK) が与えられるとき、 [M:K] = [M:L][L:K] ([M/K] = [M/L][L/K]) が成立することの証明の特殊化になっている、

(3)体の同型写像たち Q(エンチ)=Q(エン(エシ) \longrightarrow Q(エ)(エン/(ヒ²-ヨ) \longrightarrow Q(エ)(-፲)=Q(エンチ) f(エン \longmapsto f(-エョ)

の合成をてと書く、ても体の同型写像で

 $T(\beta) = \beta \left(\beta \in Q(\mathfrak{I})\right)$ ゆえに $T(\alpha) = \alpha \left(\alpha \in Q\right)$ かっ $T(\mathfrak{I}) = \mathfrak{I}$ $T(\mathfrak{I}) = -\mathfrak{I}$ をみたす、これでほいての存在が示された。

てかの(瓦月)の体の自己同型でかって(a)=a (a∈Q),て(瓦)=瓦,て(月)=-月を みたにいるならば、任意の $a,b,c,d\in Q$ について

ての形が一意に決まってしまった、これでほしいての一意性も示された,

のの存在と一意性は「ひとらの立場を取り投えた同様の議論で証明される、 口

② $Q(x_1, x_3) \cong Q(x_1, y_1)/(x_1^2 - 2, y_1^2 - 3)$ を用いて、ほいのとての存在を示すこともできる、この方針の証明も自分で考えてみよ、